

先端医療薬学 1

【後期】月 1 柏田 良樹

ここで紹介された資料は蔵本 2 階授業サポートナビコーナーにありますので、どうぞご利用ください。

(同じ本が 3 冊以上ある場合は★の場所にもありますので、そちらもご覧ください)

図書

授業のテーマをつかみ事前学習や復習を効率的に進めるために、これらの図書を読むことから始めましょう

<教科書>

□ **図解漢方処方トリセツ：生薬の働きから読み解く / 川添和義著 じほう 2014**

→薬学部では必ず『生薬学』を学びますが、その生薬を鍵として添付文書の「読み方」を知る「取扱説明書（トリセツ）」として作りました。生薬を「温」「冷」「補」「動」の 4 つの働きにまとめ、処方の中でどのような働きを演じているのかを病気の進行に沿ってわかりやすく図で示しています。薬学部の学生さんには、生薬を化学物質の集まりとしてではなく「薬」として知っていただくためにも役立つことと思います。医療系学生の漢方学習入門書としてはもちろん、現場の薬剤師の皆さんにも実用書として利用いただけるよう、既存の医療用漢方 148 処方すべてについてメーカー間での違いや服薬指導のポイントなどを紹介しています。

【499.8||Ka】

<参考書>

□ **現代医療における漢方薬 / 日本生薬学会監修 改訂版 南江堂 2016**

薬学部学生に対する漢方の教科書として作成されたもので、歴史から方剤、生薬に至る広い範囲について書かれています。広く浅く解説されているため、ある程度学習が進んでいる方にとっては少し物足りなさがあると思いますが、全くの初学者にとってはいい入門書になると思います。主な執筆者が生薬系教員であることから、生薬についての情報がかなり多くなっています。

【499.8||Ge】

□ **学生のための漢方医学テキスト / 日本東洋医学会学術教育委員会編 南江堂 2007**

医学部学生が漢方を学ぶために作成されたもので、東洋医学会が編集しています。写真や図表を多く使って初心者にもわかりやすく解説されています。四診を中心とした診断と鍼灸、方剤といった治療について重点を置いて書かれており、知識が診察に直結するよう工夫されています。テキストなのでかなり広い範囲を解説していて、漢方薬理など医学部視点からの漢方を学ぶことができます。

【490.9||Ga】

□ **漢方方剤ハンドブック / 菅沼栄著 東洋学術出版社 1996**

いわゆる 120 処方を中心に、漢方処方を中医学的観点から解説したものです。専門家向けの書物なのでやや難しい内容になっています。ただ、できるだけ平易な言葉で解説されているので、少し学習すれば十分内容が理解できるようになっています。臨床応用や注意事項も記載されていて、現場でも役立つように工夫されています。

【499.8||Su】